

皆さん、こんにちは。「正信偈」を学んでまいりまして、今日から天親菩薩のところに入ります。テキストでは十五頁ですね。初めの二行四句を拝読させていただきたいと思います。どうぞゆっくり拝読しますから声をお出しくださってお願い致します。

天親菩薩造論説 帰命無碍光如来

天親菩薩は、『浄土論』を著わされてみ仏の心をつぶさに説かれました。

「私は碍（さまた）げなき光の如来に帰命します」と表明され、

依修多羅頭真実 光闡横超大誓願

釈尊の教えに依って真実の帰依処を顕し、人みなが迷いの生活からただちに目覚めに至る、大いなる誓願を明らかに説きあらわされました。

全部読めばいいのですが時間の限定がありますので、今日学ばせていただくところを拝読させていただきました。今日の進度としては、初めの一行二句になるかと思います。よろしくお願い致します。今日は残暑の厳しい中、沢山ご参加くださりまして、誠に有り難く存じます。

いつものように、初めに感じておるところを申させていただきます。まずですね、二十一号の台風、それから北海道の震災。大変大きな被害がありまして、沢山の尊い命を奪われたということがございます。未だに行方不明の方々もいらっしゃるし、悲しみと不安に絶えない方々がいらっしゃるのであります。こういう大自然の災害に遭いますと、人間存在の弱さ、脆さ、そして悲しさということを一入、知らされることでもあります。そして何事もない普段は忘れているのでありますけれども、平凡な一日一日がどれ程尊い大事なことであるかわからないということを教えられるのであります。

それから今日ご紹介をさせていただきたいと思いましたが、高校生俳人ということで、岸和田の小林凜さんという方ですね。私もテレビで観ただけなのですが、大変感銘を受けました。この人は今、高校二年生。生まれた時に九百グラム台で、いわゆる未熟児で産まれました。お母さんは大変心配なさったようですが、いのちは無事に育ってきたということでもあります。小学生の時も中学生の時もいじめられて不登校であったということ。ちなみに小林さんのことをご覧になった方おられますか。お母さんとおばあちゃんの三人暮らしのようで、お母さんは高等学校の先生をしておられて、おばあちゃんがどうも俳句をやっておられるように見受けられました。小さい時から俳句に親しんでおられて、今は俳句に関する本を何冊か出しておられるようです。まだ見ておりませんので、これから読ませていただきたいと思います。いくつかご紹介をさせていただきます。

いじめられ 行きたし行けぬ 春の雨

いじめられて、学校へ行きたいのだけど行けない。この春の雨は、単に雨ということではなくて、新学期の始まる頃ということがあるわけですね。俳句の言葉は短いだけに非常に深い意味がありまして、これを歌われたのは十一歳の時ということでございます。この句は不登校の方の心がよく短い言葉の中で歌われておると思いますね。

月光を 浴びし三人 時止まれ

三人というのはお母さん、おばあちゃん、私という。月の光によって、心が非常に柔らかく、慰められた。この時が止まってほしいという気持ちを感じますね。

尺取虫 一尺二尺 歩み行く

非常にゆっくりした歩き方ですが、尺取虫が一尺二尺歩み行くと。これも私は素晴らしい句だと思うのですね。力及ばずとも全身を動かして歩く。それが一尺二尺ずつ歩み行くという。そういう生活の確かさということをお歌われておるのですね。

有名な日野原重明さんと仲良くなられて、文通をされておられまして、テレビでは日野原先生に呼ばれて北海道へお母さんと二人で尋ねていくというシーンもありました。柱で身長を計ると。凧さんが先に計って、それで重明先生が計るというシーンがありましたね。日野原先生がそっと背を計ってくるのですよ。凧さんの方が、背が大きいのですけど。その庭にザクロの木があって、ザクロの身が弾けるようだと。

実ざくろや 百四の師と 背くらべ

日野原さんは百五歳ですかね、昨年の七月に亡くなられたのでありますが、こういうのは本当に嬉しい句ですよ。

優しさは 無限大なり いわし雲

春風に 背中押されて 高校生

去年（こぞ）今年 流るる刻（とき）ぞ 愛おしき

今は高校二年生。高校生とは思えないような、素晴らしい俳句でありまして、彼自身の言葉でも言っておりましたけれども、いじめられたというそういう悲しさ辛さを通して、それが俳句になる時、それが受け止められていったというようなことを言っていました。しかし未だに大人たちに対して癒されないというか、許せないものがある。

いじめられた時に学校の先生に申し入れたようではありますが、先生が何ともできなかったということに対して何かあるように拝察致しました。学校の先生も大変なお仕事ではありますが、今は絶対ではありませんので、先生も辛いということがお有りでしょうが、なんともならないということに対して恐らく彼はその先生の姿勢に感じたのではないかと私は拝察するのです。何とかならないにしても先生ご自身が傷付くほどに一生懸命にやられるのと、まあそうでないような通り一遍のやり方ということは人間の触れ合いの中では感じるのですが、恐らくそういうことがあったのではないかと。これは私の推測ではありますが。

高校生の小林さんが小さい時から俳句を歌うということによって生きられてきたとおっしゃられて、非常に明るい印象を受けました。家の生活においても、お母さんが高校の先生でありますから、ちゃんと日程を組んで学んでこられたようでありまして、お母さんおばあちゃんが倫理的に責

めるのではなくして、じっと見つめ、温かく包まれているという。そういう雰囲気を感じました。私なんかは戦前の育ちでありますから、不登校なんていうのはとんでもないと。倫理的に叱られるということがあるわけでございます。教育の問題についても考えられておることがありながら、不登校ということについて、温かく見守るといことも、流れとしてありました。

私は大変大事なことでないかと思えますね。痛みを感じておるものに対して更なる痛みを追いやるということはいかがなものであろうかと考えられるのであります。彼の場合は俳句という道が開かれておりましたけれども、私は彼の姿に触れてですね、私たちにはおよそ人間にはお念仏の道が開かれておるのだということを思うのですね。中々そのお念仏のご縁に遇うということは容易ではありませんけれども、恐らく家庭に一人の念仏者がいれば、その悲しみを悲しみとして受け止められる。共に悲しむということがね、同悲ということがある。同じく悲しむ。如来のですね、大悲にして初めて同悲という。

私たちが、生きとし生けるものが悲しみ、哀れだと言って哀れむようなものは小悲であると。中悲というのは法縁、仏法の法ですね。法を説いて、大事なのちだと。大悲というのは無縁の大悲。助かる手掛かりのないそういうものに対してですね、大悲、大いなる慈悲を表したもうという。それはその人の身と同じく同体ですね。弥陀同体の大悲というふうなことも申します。

自分自身の姿を思い知らされて、悲しむ、嘆く時、自分が悲しみ、嘆いているのだけど、これは如来様が私の中で嘆き悲しんでおってくださるのであるという。そういうことを感じるということがございます。先立って逝った親たちが、自分がこんなことをしていると、さぞ嘆き悲しまれるであろうと。これは人間関係の上で誰でもが感じるところでありますけれども、そういうものは小悲小慈であると。それは自分の血の繋がる親なればこそ、血の繋がる子どもだからこそという、限定があるのですね。相対的なわけですね。だから小慈小悲ということになるのですね。法縁、仏法の縁は、この仏法の縁に遇うか遇わないかによって感じるか感じないかということがありますから、中悲と。無縁の大悲というのは助かる縁も、『歎異抄』の中に

いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

(真宗聖典 六二七頁)

という有名な言葉がありますけれども、どうにもこうにも腹立たないというか、始末に負えない。始末に負えない私、中津功であると。そういうことをね、教えてくださることが有り難いですね。常識的に言えば始末に負える中津になりたい。これは人間の理想というか、願望ですね。自力の計らい。はっきりしているのですね。自力の計らいは自分の心や力でなんとかなる人間、なんとかなるぐらいではなくて人様に褒められ、讃嘆される人間になりたいというのが人間の自力。

自力というは、わがみをたのみ、わがころをたのむ、わがちからをはげみ、わがさまざまな善根をたのむひとなり。

(真宗聖典 五四一頁)

自力を発揮してやっていきたいという。そこには意志というのは立派であっても、生活すれば必ずから挫折がある。もし挫折がないならば、それはまだ自分の力に驕っているからであると思えますね。例えて言えば幸せということにしても自分だけの幸せでなくして、あらゆる人々の幸せということになると、これは挫折せざるを得ません。家族という少人数であっても、自分の力でどうにもならない。親子という関係であっても、夫婦という関係であってもですね、どうにもならない、力及ばずということがあるのでありまして。そこに他力本願力に依るしかない。自分自身が身心に

いただいておりますはたらきですね。そのはたらきは気が付いてみれば自分だけではなくして、十方衆生の上にはたらいておる、そういうはたらきであると。いのちであると。生かされているということであると。

日野原重明さんの言葉の中に、「人間に生まれてきたということ自体が、尊いことなのだ」ということがありました。仏法に触れて初めて人間に生まれてきたということ自体が尊いのだと。もっと言えば人間として存在していること自身がかけがえのない意味を持っているのだということも教えられるのですが、これは厳しいです。どうしても現実状況の中で受け入れられないような状況ということもあるわけでございまして。そういう方が生きるということは厳しいことであります。

今、浮かびますのは、前にも紹介しました中村久子さんという方が小さい時に突発性のダストで両手両足を失われてね。ダルマ娘と呼ばれて、見世物芸人の中で生活するということがあったわけですが。中村さんは本当に念仏に遇うという深いご縁をいただかれて、生きていかれました。そういうふうな状況の中で、それを

手足なき 身にしあれども 生かさるる 今のいのちは 尊かりけり

そういう中村さんの歌があります。手足のない身であって、生かされておる今のいのちは尊いということを感じて、歌い上げることができるということは、容易ではありません。歌というところには、感動があるわけですね。偈ですね、仏法では偈。感動があるのです。小さな喜びではないのです。身心を挙げて、全存在を挙げて、讃嘆せずにはおれないようなそういう真実の感動。身を喜ばしめる、心を喜ばしめるようなそういう感動を表す。

今、私たちが学んでおります「正信偈」もね、偈文ですから。偈頌、頌です。感動が、非常に深い感動がある。そういうことが拝読すれば自ずと感じていくのであります。そういう大事ないわれがある。私たちは念仏の教えに遇うと、「正信偈」をいただいていくということは、もう私たちはすでに大いなる恩恵をいただいていると。もう道はすでに開かれておると、そういう意味があるわけですね。

今回から七高僧の第二祖の天親菩薩に入るわけですがけれども、天親菩薩にも、もう既に遇っているのです。私たちの生活の中では、遇っていないながら遇っている自覚はないということがございます。「正信偈」の中に、「天親菩薩造論説」と、天親菩薩の御徳が讃えられているところがあります。だからお勤めというのは大変深い意味があるわけですね。それから和讃の中で、

本願力にあいぬれば

むなしくすぐるひとぞなき

功德の宝海みちみちて

煩惱の濁水へだてなし

(真宗聖典 四九〇頁)

これは親鸞聖人が天親菩薩の死によって歌われました。これは親鸞聖人の教えを聞かれる方ならば、多くの方々が聞いて、感銘を受けておられる。もしそういうことがないにしても、大事な方が亡くなられて、お葬式を勤めると。その時に和讃で歌われるということがあります。和讃としては、「正信偈」としてはすでに遇っているのだけれども、遇っていますかと言われるとですね、どうでしょう。問題が残る。

それは今、遇うという。遇うということはいつでも今遇うということであると言えると思います。過去に遇った、そういう経験的、体験的な出会いということとはたくさんありますけれども、そ

それは本当の出遇いであるならば、今遇うという、そういう内容を持つのではないかと思われませんが、どうでしょうかね。

それは前にも申し上げました、『大無量寿経』の中で、仏様方が去来現、過去未来現在の仏様方がお互いに相、念じ合うという。常識的な時間ではないのですよ。現在は過去を包み、未来を包んでおる、そういう現在ですね。未来も現在をなくして未来はありません。去来現の仏、仏と仏と相念じたまえりと。私たちの人間の時間的な考え方は、やっぱり過去から現在未来というふうに考えておりましたですね。仏様の世界に触れると、未来から人間を超えた無限の世界、はたらきから現在を照らし、過去を照らすという。したがって、如来の光に照らされた過去は、単なる過去ではない。今ある上で、なくてはならない過去であるという、そういう過去の深さですね。過去の意味。

人間が過去を考えると、良い過去と悪い過去とどうしても区別せざるを得ないということがありますけれども、如来の光に遇うと、教えに遇うと、すべての過去が、現在過去、この世にある内容となっているという意味を教えられる。どんなに気持ちの上では認められたくない、あれだけは弾きたいということであっても、それがあから今があるという内容となる。内実となるという。そういう意味がございます。

教えに遇うか遇わないかということは、もう人生が丸つきり意味が変わるといって決して言い過ぎではないと私は思います。天親菩薩という方にも、私たちはもう既に遇っているという。そういう意味が、私は人生のですね、広さ深さということの表れではないかと。仏縁に触れるということはそういう大事な意味があるのだということをお教えされるのであります。

天親菩薩はですね、ヴァスバンドゥという、インドのサンスクリットの言葉で世親と。天親、世親とね。唐時代の玄奘三蔵以来は世親と。この世親菩薩は龍樹より二百年くらい後の方で、西暦四世紀の初め頃、北インドで生まれられまして、インドはカーストが厳しいところですが、バラモンの出身であります。小さい時から小乗仏教を学んで、非常に優れた人であり、大乘を批判したと。小乗というのは小さな乗り物。大乘というのは大きな乗り物。すべての人々を平等に救い取るという。小乗というのは仏陀釈尊が覚りを開かれたような、一人ひとり、覚っていくのであるけれども、その覚りが、十方衆生に及ばないという。これは道理ということで表しておりますけれども。

その人の人格とかね、精神生活とかね、そういうものが本当に広く深いという。しかしそれは個人的な、真似できないような。人間はおかしなもので、真似できないようなものが好きということがあるので。なんていうのですかね。これは人間の性ですが。一位が一番であってですね、後は駄目だと。駄目だとは言わないけれども、中々人間の世界では平等が尊いということを実践するということが並大抵なことではありません。

しかし平等が尊いという眼が開かれなければ、この世が生きていけないと。何故かならば、いつも比較の中にある。比べられるものの中にある。闘争の中にあるということになるのですね。如来の本願にして初めて平等の大悲ということをお教えされてですね、比較を超えて、一人ひとりが平等に尊いということがお教えされてくるということがあるわけです。

天親菩薩は小乗の教えで、大乘を批判して非難していたわけですが、お兄さんの無著という方がおられまして、無著は大乘の教えを学んでおりました。その無著が天親菩薩に、小乗の教えに捉われておるようだけれども、それでは本当の救いにならないという話をして、それで天親菩薩もああ自分は間違っていたということをお悔いしたという。この逸話が凄いのですけれども、自分のこの舌で大乘仏教を批判し、非難したと。だから私はこの舌を切つてね、詫びるのだという意味で舌を切ろうとした。その時、兄さんの無著がね、それを止めてね、舌を切ったくらいで何になるかと。あなたが大乘を非難した、その舌で大乘を説いて、輝かせてくださいと。これも凄いな、逸話だと思うのですよ。あなたが非難したその舌で、大乘の尊いことを説いてくださいと。

それから天親菩薩は一生懸命に学んだのです。唯識教学の体制ですね。第一祖の龍樹菩薩は中観仏教。八不中道という。それから瑜伽唯識。人間の深層意識まで尋ねて、深い煩惱と、そしてまた第八識は蔵識とも申しますが、非常に深い人間が目覚めていくことを欲求するような。無意識の世界まで尋ねていかれたと。そういう天親菩薩、世親菩薩が、「願生偈」を表されているわけです。

願生偈は、「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国」で始まる偈文ですね。その偈文の中に一心。世尊我一心にという。それが人間の目覚めていく大事な一心であるということを読まれて、明らかにされておられるわけであり。大きなお仕事をしておられる。

親鸞聖人は、初めから親鸞という名前だったわけではないですね。天親菩薩、曇鸞大師に出遇われて。想像ですけども、恐らく越後の流罪の後でしょうね、親鸞と名乗られた。天親菩薩の教えを本当に明らかにしつつ、受け取られた方は曇鸞大師でございまして、親鸞という名自身がですね、本願力回向という、そういうことを本当にいただいて明らかにしていくのであるというのはそういう名のりであるわけですね。

「天親菩薩造論説」という。論というのはこの『願生偈』、『浄土論』とも申します。それから『往生論』。天親菩薩が付けられた名前が、『無量寿経優婆提舍願生偈』と、非常に長いですね。『無量寿経』というのは『大無量寿経』ですね。優婆提舍は梵語をそのまま漢字で音写した。これは梵語でウパデーシャという言葉が優婆提舍というふうに音で写した。それで『願生偈』と。これは天親菩薩が造られた時の名前ですね。本願を説かれたそのお心を願生偈として表す。そういう『無量寿経』の精神が『願生偈』において歌い上げられておることによって、非常に『願生偈』は尊ばれてきました。

親鸞聖人がよき人として仰いだ法然上人ご自身が、浄土の抛り処となる教えを表すならば、三経一論これなりという。三経というのは浄土三部経。『大無量寿経』、『観無量寿経』、『阿弥陀経』。一論というのは天親菩薩のこの『浄土論』、『往生論』、『無量寿経優婆提舍願生偈』であるという。そういう大切なお仕事を、先程の逸話によるならば、大乘を謗った天親菩薩が、そのことを本当に悔いてね、大乘の教えを自らが生きるものとなって表されたという。私は天親菩薩の逸話はですね、現代において尚更というか、一層ね、輝きを増すような逸話ではないかと思うのですよ。間違っているならば、間違っていたことを、本当に悔いて、懺悔して、何を本当に讃嘆すべきであるかということを通していくということが大事なのであるということを思います。

私はそういうことを思うとき、死刑制度なんかも、絶対ではありません。世界中においても死刑制度をしていないところもありますので、人間の考えておる判断基準というのが本願力に立っているか立っていないか。これが問題ですね。

本願力というのは、あらゆる衆生、十方衆生を本当に目覚まして、いのちの尊さに目覚ましめ、存在の尊さに目覚ましめてですね、むなしく過ぎることのない人生。意味の深い功德の宝海ですからね。身に余る。そういう恩徳。人間を悩ましてやまないようなそういう煩惱の泥水が隔てない。それが功德に転ぜられると。

転悪成善という言葉がありますが。これも素晴らしい言葉ですね。人間を悩ましてやまないという悪を転じて善と成す。功德と成すという。地獄の苦は苦しく辛いけれども、たとえば言えば、太平洋戦争。大東亜戦争と呼んでおりましたけれども。まことに悲しい、絶対に二度とああいう戦争はあってはならないことであるという。それを善に転ずるならば、本当に戦争の起こらない世界ですね。これは無限の課題です。もっと具体的に言えば、原爆を沢山作っておりますけれども、原爆のいらぬ、廃滅する社会。そこまでですね、本当の真実に目が開かれれば、厳しいし、またそれは十方衆生に及ぶということですね。それはあの戦争によって未だに悩んでおられる方々が沢山おられる。ただ私たちは知らない。知ろうとしないということがあるのでありましてですね、真

実ということはこの人間の世界になくはならないはたらきであるという。

『願生偈』は『真宗聖典』にも収められておりますけれども、『願生偈』の偈文では、『大無量寿経』のおこころを偈頌にして、一心願生ということで讃えられておる。散文の長行のところでは浄土に生まれる道として五念門が説かれております。礼拝、讃嘆、作願、観察、回向。

礼拝ということは、何に礼拝すべきかということがわからないと、人間は人間を迷わすものを礼拝するわけですよ。お金を拝んだりね、権力を拝んだりね、地位を拝んだりする。讃嘆は勿論、阿弥陀仏なのでございますけれども、本当に尊むべきものは何かという。人間はそれがわからないとね、やっぱり自分の個人的な幸せを願ってしまいます。自分さえ、自分たちさえ幸せになれば他はどうなってもいいと、極端な場合ね。そこまで行ってしまいます。作願というのは浄土に生まれることこそを願うという。観察というのはその浄土に生まれる道を本当に明らかにして浄土に生まれる。回向するというはその大事なはたらきを人々と共に生きていくという。

まことにはっきりしているのですよ。具体的でしょう。そういうことを天親菩薩は、一心が大事であると。その一心が実現するような道は、礼拝、讃嘆、作願、観察、回向の五念門である。この五念門も、いうならば念仏門に帰すると。念仏門を開けば、五念門であるということは言えるかと思うのであります。大事なことは、生きることに悩んでおる人間に本当に大いなる道を開くという。そういうことが願われておるわけですね。

ちなみに論ということは菩薩が造る歩み、仕事なのだという。人間を目覚ましていく大いなる道が天親菩薩によって表されたという。そこに論を造りて説かれた。つぶさに説かれたと。つぶさに説かれたというところには、私たちの上にそれが道として開かれる。そこまで説かれたという意味ですね。

次は帰命、無碍光如来。これは私たちが親しんできておる言葉でありまして、これはもう念仏ですね。帰命、丁寧に言えば、尽十方無碍光如来。御承知のように南無阿弥陀仏は名号ですね、六字の名号。これを丁寧に言えばね、帰命尽十方無碍光如来。十字名号と言われる。南無阿弥陀仏の意味を、心を開けば、帰命尽十方無碍光如来と。南無はナマスという梵語で、帰命ということであると。阿弥陀はアミターバ、アミターブツということで、無量寿無量光ということである。無碍光如来であると。

名号というのは凄いのですよ。凄いということはね、私たちが育ってくる家庭の中で南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏という、何か呪文かおまじないか、そういうふうを感じることもあるならば、それは正当ではないと。本当にわかっていないと。帰命尽十方無碍光如来ということが、南無阿弥陀仏なのだ。尽十方というのは、東西南北四維上下と、あらゆる世界を尽くして、妨げのない光の如来がはたらくという。本当の智慧、本当の慈悲がはたらくという、そういう名のりですね。

人間には、天災あり、人災あり、何が起こるかわからない。いつ自分が地獄の底に叩き落とされるか。そういう中であって、本当の拠り処となるのは帰命尽十方無碍光如来。阿弥陀の光に照らされて、この現に生きている生の尊さ。無限なる光。無量なるいのち。そういうことを教えられるとき、与えられた限りある人生が、本当に尊いのだなということをしてですね、教えられた。人間として生まれてこなければ良かったなんていうのは極めてね、小さい小さいちやちなちやちなということになるかと思うのです。そうではなくて、人間に生まれたということがよくよく深いご縁を受けて、人間に生まれてきたのであります。その人間を、いのちのある限り、果たし遂げていく道が開かれていく。それが帰命尽十方無碍光如来。南無阿弥陀仏の道である。

この天親菩薩の浄土論を、親鸞聖人がいかに尊ばれていたかということにつきましては、これは『尊号真像銘文』という、仮名聖教なのでありますね。

婆藪般豆菩薩曰、「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国 我依修多羅 真実
功德相 説願偈総持 与仏教相應 観彼世界相 勝過三界道 究竟如虚空 広大無辺際」(浄
土論) と。
(真宗聖典 五一七頁)

浄土論の中から必要な文章を持ってきて歌われているのですが、一番初めのですね、

世尊我一心 帰命尽十方	世尊、我一心に、尽十方
無碍光如来 願生安楽国	無碍光如来に帰命して、安楽国に生まれんと願ず。

(真宗聖典 一三五頁)

これはもう人生の根本問題。もう人生そのものの行方というか、願いというか。それを歌い上げて
いるようですね。世尊、我一心に、尽十方無碍光如来に帰命して、安楽国に生まれんと願ず。願生
偈ですね。親鸞聖人はこの一心ということを非常に尊ばれて、一心の華文ということに歌っておら
れています。煩惱妄念の尽きない私たち凡夫の上、に一心として賜ると、表れてくるというそうい
う一心の華文という。これも本当に画期的な素晴らしいことですね。

人間は、あれこれ修行して煩惱の智慧を得て覚りを得たというのが好きなのは、好きなのは、
それはそれでやっていけばいいのです。どうぞご自由に心ゆくまでやってくださいと。そういう道
もありますということなのですが。申し上げたいことは、仏法が七高僧の伝統においても、やっぱ
り徹底的にね、人間の現実を凝視し、見つめ、明らかにし、そこに人間が人間として生きていくこ
とができる。人間が人間としてと言いましたのは、六道流転のドツボの中に、はまり込んでしま
うのではなくて、人間が本当に人間として、尊厳性に目覚めて、仏になる身となって、生きていく
ことができる。そういう道を明らかにされたということに徹底していると思いますね。これにつ
いてね、『尊号真像銘文』では、一句一句一字一字丁寧に注釈しておられるのですよ。

この論をば『浄土論』という。また『往生論』というなり。「世尊我一心」というは、世尊は釈
迦如来なり。我ともうすは、世親菩薩のわがみとのたまえるなり。一心というは、教主世尊の
御ことのりをふたごころなくうたがいなしとなり。すなわちこれまことの信心なり。
(真宗聖典 五一七頁)

世尊我一心の一心というのは、まことの信心であると。真実の信心であるという。それは世尊に遇
うことにおいてですね、教えをいただいて開かれてくる心ですね。

「帰命尽十方無碍光如来」ともうすは、帰命は南無なり。また帰命ともうすは、如来の勅命に
したがうところなり。
(真宗聖典 五一八頁)

帰命ということは、如来の勅命にしたがう。これはね、本当に素晴らしい言葉ですね。如来の勅命。
私たちの真心を傾けて帰命を礼拝すると、そんな程度のものではない。如来の勅命であると。それ
は生きとし生きるものを呼び覚ましてやまない、いのちの最も深い、消さんとして消すことのでき
ないはたらきであると。勅命であると。人間の中にはそういう如来の勅命がはたらいておるとい
うふうなことを教えられるということは、もう人生の上で大問題ですよ。

何故かならば、些かなことで駄目な人間だというふうに自分で自分を見捨ててしまうというこ
とがあります。しかし私はやっぱり人間として生きるならば、自分で自分を見捨てるといことは

中々できないのだという事実があると思うのですね。例えて言えば、あんまり良い例ではありませんけれども、自殺しようと思って、今日は死のうと思って、今日はやめておこうと。明日にしよう。明日になると今日はやめておこうと。ただ意志軟弱でやめるにではなくてね。そこには何かのちの深い問題が苦悩として表れている。苦悩として表れているということがね、大事な点だと思うのですよ。この帰命というのは如来の、本願招喚の勅命であると。これは本願が人間を呼び覚ます、本願招喚の勅命であるという。こういうことは、本当に人類社会の中に光ってやまない言葉です。その意味するところはね。私は浄土真宗に遇うということはそういう、大いなる意味、大いなるはたらきを教えられることであると思いますね。

「帰命尽十方無碍光如来」ともうすは、帰命は南無なり。また帰命ともうすは、如来の勅命にしたがうところなり。尽十方無碍光如来ともうすは、すなわち阿弥陀如来なり。この如来は光明なり。尽十方というは、尽はつくすという、ことごとくという。十方世界をつくして、ことごとくみちたまえるなり。無碍というは、さわることなしとなり。さわることなしともうすは、衆生の煩惱悪業にさえられざるなり。光如来ともうすは、阿弥陀仏なり。この如来はすなわち不可思議光仏ともうす。この如来は智慧のかたちなり。十方微塵刹土にみちたまえるなりとしるべしとなり。
(真宗聖典 五一八頁)

十方微塵というのとは細かな塵ばかりの、どんな些細な世界にもみちたまえるなり。例えて言えば、こんな気持ちは人様にわかるものかと、人間はしばしば言います。微塵刹土というのとはそういう世界にも、心の一番深いところにも、はたらいているもの。

「願生安楽国」というのは、世親菩薩かの無碍光仏を称念し、信じて安楽国にうまれんとねがいたまえるなり。
(真宗聖典 五一八頁)

これは親鸞聖人が非常にもう懇切丁寧に一字一句こうして拝読して聞けば、頷くことができるような、そういうふうに大切に説かれておるわけです。人類に、人間にこの私自身にまで、浄土の教えが説かれてきておると。浄土論に説かれておる一心帰命ということ。帰命尽十方無碍光如来。南無阿弥陀仏のおこころが説かれておるということは非常に今を生きる私たちに深い意味があるということをお教えられるのであります。

時間が参りましたので、話のほうは不十分ですけれども、これで終わらせていただきまして、後は座談会のほうでよろしくお願い致します。どうも有難うございました。